

そこからの一歩のために

東山田 木村 一恵



年度末は大宴会を

年度末は毎年、家族で大晦日と同じくらいの大宴会をする。これは、私の実家の話です。新学期の前に、家族全員で炬燵を囲み、母の手料理を前に、一年の報告をするのです。自分が頑張ったことや褒められたこと、何でも良いので思い出を話します。

三人姉妹の末っ子である私の順番はもちろん三番目。さほど自慢できる話もなく、「部活頑張りました、コンクールは銀賞でした」くらいの話しかできません。

それでも一生懸命に話すと、最後に父が全員を褒めてくれます。

怒りもせず、いやみも言わず、叱咤激励ではなく喝でもなく、ただひたすらに褒めてくれるのです。

そして最後に、「じゃあ、新年度も元気でそれぞれ頑張るぞ」と約束して乾杯するので。ちなみに、私の実家は佐久。お祝いの料理はもちろん佐久鯉。生きてる鯉を一匹調達し、台所で母がメます。あらいに鯉こく、うま煮と鯉料理が並びます。が、残念ながら私は鯉が苦手でした。

一年を振り返り、思いを馳せる

ともあれ、そんな家で育った私には、この宴会が必要です。

私は主婦力が高くないので、ときばきと豪華な食事は作れませんが、いつもよりちよつとだけごちそうっぽいものを作り、あとはプロが作ったきれいなケーキで場を盛り上げます。食事をしながら、家族四人がそれぞれに一年の出来事を話します。すでに反抗期となった子どもたちは、多くは語りませんが、語りなくても一緒に一年を振り返り、親なりに子どもの気持ちに思いを馳せてみるだけでも価値があります。だって、忙しい毎日はずっとの日にじっくり寄り添ってあげる時間すら奪っていますから。

リセットして新年度を迎える

楽しかったこと、うれしかったこと、悔しかったこと、腹が立ったこと・・・私自身もその時のことを思い出し、喜んだり悔しがったり。一年とは実に長く、いろいろなことが起きます。けれど時間がたった出来事は笑い話にできます。いろいろな想いを家族みんなでかみしめ、笑って、いいことを盛り上げ悪いことを笑い飛ばし、リセットするのです。そして、また気持ちを新たにして新年度のスタートにします。

親がしてあげられることはごくわずか。それでも親として、静かに見守っていきたくらいと願います。

今年の我が家は受験もなく、静かな年度末ですが、母である私は、雑巾を縫い、ぼろくなったものを繕い名前をチェックし・・・と、意外と忙しいです。

毎年バタバタですが、気分を新たに、清々しい新学期のスタートをされるようにしてあげたいものです。



娘、保育園やめるってよ

〜新米お母さんだった頃〜

西赤砂 吉池 露



四月。進級・進学など新しいことが始まる季節です。慌ただしい中でも、やる気や希望が胸に溢れていて嬉しい季節です。

我が家の娘にも、小さい体にいっぱいのワクワクをつめて保育園に入園した春がありました。初めての子ども、初めての入園。親もドキドキです。

当時私はフルタイムの仕事をしていたので、入園式の翌日から少し早めに登園させました。昨日のにぎやかさがうそのように、静かな教室に娘はぼつんと一人。早朝担当の先生に絵本を読んでもらう姿は、いつもよりぐっと小さく見えました。

それでも特に泣くこともなく順調に登園できてほっとした頃、保育園から帰って来た娘が突然宣言しました。

「お母さん、園長先生に電話かけて。保育園やめるから。」 次の日から娘の全力の抵抗が始まりました。朝はなかなか起きず、着替えもしません。朝食も食わず、ぐずぐずしています。いやがる娘を引きずるように保育園に連れて行き、泣き叫ぶ娘を先生に押しつけて逃げるように仕事に行く日々が続きました。娘は笑顔が少なくなり、体調も崩しがちになりました。

仕事、家事、育児と自分なりにがんばってきたつもりなのにどうして・・・と、悩み疲れたある日、実家の母に「お母さんがそんな険しい顔をしてたら子

どもは不安になるよ。まだ三才なんだから親の思うとおりにはならないよ」と言われました。そうか、私は「まだ三才」の娘に「もう三才」と言って、泣いちゃだめとか言うことを聞いてとか、難しいことを求めてきちゃったんだなあど気付きました。

日曜日の夜、布団に入った娘が「：明日、保育園やだなあ。また泣いちゃうなあ」とつぶやいたので、「明日は泣いていい日にしようか」と返すと、びっくりした顔で布団から起き上がって来ました。「泣きたくなる時もあるもんね。今まで無理させちゃってごめんね。」

布団の上に正座して頭を下げると、涙がぼとぼと落ちました。泣いている私を見て驚いた娘も「お母さん、泣かないで」と泣き出しました。二人で抱き合っ

てわんわん泣きました。月曜日の朝、「：今日は本当に泣いてもいい日？」とおそるおそる聞いてくる娘に「いいよ！保育園で泣き足りなかったらさ、昨日みたいにまた二人で

いっばい泣こうよ」と笑って答えました。「大人はそんなに泣いちゃいけないんだよ」娘も笑っていました。手をつないで上を見ると、春の空は黄砂がかすみ、園庭の桜はもう散りかけていました。今まで空も桜も見上げる余裕がなかったんだなあど、改めて思いました。



春、ブランコに乗って

この春、娘は高校二年生。体も態度も大きくなり、母に反抗しながらも毎朝元気に、当たり前のように学校に通っています。四月。桜が咲く頃になると、新米お母さんだった自分をなつかしく思い出したりします。